

江戸時代の政治と武士の学び

はじめに

みなさんは、江戸時代の武士についてのどのようなイメージをお持ちだろうか。中学校の歴史分野の教科書によれば、「武士は、主君から領知や米で支給される俸禄を代々あたえられ、軍役などの義務を果たし」た存在で、「名字・帯刀などの特権を持ち、支配身分として名誉や忠義を重んじる道徳意識」「武士道」を持っていた「新しい社会 歴史」東京書籍。一方で、殊に近世後期に焦点を絞ってみると、例えば小学校社会の教科書には、武士が藩校で朱子学とか四書五経で知られる儒学等の学問や武芸を学んだこと、「新しい学問」(洋学や国学)を学ぶ人と共に幕藩政治への批判を

小関 悠一郎

行い始めたこと、また、遂には倒幕を実現して明治維新の改革を進めていったことが大きく取り上げられている(『新しい社会 六上』同)。どうやら、近世後期の武士と学問とは切っても切り離せないものであり、それは幕末維新期の政治の激動とも密接に関わっているようなのだ。

では、武士たちは具体的にいかに学び、政治とどう関わったのだろうか。また、その歴史的な意味を理解するにはどうしたらよいのか。筆者は、個々の武士たちが直面した大小様々な課題を理解し、そこから生まれる問題意識と行動が彼らの学びとどう関係しているのかという点を、史料に即して明らかにすることが重要だと考えている。そうした事例研究を積み重ねることで、武士が様々な学問や武芸とどう関わっていたのか、その学びが幕府・諸藩(さらに

は明治新政府の政治にいかにか影響したのかという、先ほどの教科書記述に関わる研究課題の解明に結びつくのではないかと思うのである。

しかし一方で、右のような観点からの研究は、これまでに十分には行われてこなかったように思われる。もちろん、学問・思想や政治の面で顕著な活躍をした一部の武士については、その思想形成を明らかにするような研究も行われてきている。だが、そうした顕著な事跡をのこした者はごく一部であるに過ぎず、むしろ大多数の武士はそうした事跡とは無縁に見える存在だったに違いない。そしてそのような一般の武士の意識と行動こそは、当時の時代状況をよく反映しているとも考えられるのではないか。本稿では、そうした武士が残した史料を読み解くことが今後の大きな研究課題の一つになるのではないかとの見通しに立って、その読み解き方を考えてみよう。

一 武士が残した史料

——上総国久留里藩士田丸家文書の場合——

(1) 田丸家文書発見の経緯

いったい、武士の営為を知るための史料は、どこに、ど

れほど残されているのだろうか。ここではまず、本稿で取り上げる田丸家文書の発見の経緯を紹介してみよう。

筆者が田丸家文書の存在を知るきっかけとなったのは、勤務先の大学の学部学生から、東日本大震災で被害を受けて取り壊された建物から辛くも運び出された古文書が、学生の知人宅(千葉県茂原市の渡邊家)に所在することを知らされたことである。知らせを受けて筆者は、千葉県で民間に所在する歴史資料等の保全活動を行っている「千葉歴史・自然資料救済ネットワーク」に協力を求め、渡邊家の古文書の整理作業を行った。このことが新聞で紹介されたことを契機に、渡邊氏の知り合いである田丸家(同県君津市)に残された古文書の調査・整理も実施することになったのである。同市の久留里城址資料館の協力も得て、現地に赴いて古文書所蔵者のお話を伺い、古文書一点一点をリスト化し(文書目録の作成)、その写真撮影作業を行ったのである。

このようにして、渡邊・田丸両家の古文書を調査・整理することになったのだが、この二つの文書群はその性格・出自に大きな違いがある。則ち、前者は渡邊家が居住地長尾村の村役人を勤めた際の文書や土地売買に関する証書類等を中心とする村方文書(じかたもじじょう)だったのに対して、後者は、田丸氏が久留里藩三万石の大名黒田家に代々仕えたことに関わって伝存した武家文書(家臣文書)だったのであ

る。戦後、膨大な研究成果・蓄積を生み出してきた近世史研究において、中心的な史料とされてきたのは村方文書だった。もちろん、武家文書の整理や研究も数多積み重ねられてきたのだが、江戸時代には約六万の村が存在し、それぞれで必ず文書が作成されたのだから、それは近世史研究において基本的とも言うべき重要性を有すると同時に、現在でも各地に膨大な村方文書が残されているのは当然でもある。

では、筆者が武家文書Ⅱ田丸家文書に出会ったのは、稀に見る偶然だったのだろうか。筆者はこれまで、山形・宮城・千葉の各県域を中心に、資料ネットの活動や史料調査会等に参加して地域の旧家で古文書を調査・整理する機会を得てきたが、そうした機会に目にした武家文書の数は決して少なくない。また、博物館や文書館等の史料収蔵機関でも、地域や機関にもよるが数多くの武家文書が収蔵されている。こうして、研究の光を当てられずに埋もれたままの武家文書は、全国に数多く残されていると思われる。田丸家文書も、そうした武家文書の一つだったのである。

(2) 久留里藩士田丸氏の系譜

では、いったい、田丸家文書から何がわかるのか。また、どう読み解けばよいのだろうか。まず押さえておく必要が

あるのは、そもそも田丸家がどのような家だったのか、という点である。一口に武士と言っても、將軍・大名から下級武士以下に至るまで、その存在形態は千差万別だからだ。武士の家の出自や階層を知る上で最も基本となる史料が、代々当主の役勤め等の事跡が年月日と共に書き込まれた勤書^①や家譜類である。そこで、田丸家に残されていた家譜によつて同家の来歴を紹介してみよう。

元々、田丸氏は、寛保二(一七四二)年に譜代大名黒田氏が久留里に転封した際、足輕として登用され(森家諸留^②東京大学史料編纂所蔵)、基本的には役方関係の実務(例えば、二代政春は河岸下役・小人目付・作事元方下役等)を担う給金・扶持・俸禄^③取り、徒席・目見席の下級藩士(久留里藩士の序列については、『藩史大事典 第二卷』参照)として勤役している。藩士として定着した田丸家が頭角を表したのは、四代義質の時である。義質はその民政能力を認められて、文化一〇(二八一三)〜天保六(一八三五)年まで約二〇年間、代官を勤め、行政経費の節減や年貢の増収、請免^④の実施、馬代金取立等にあたり、臨時の役も数多くこなした。その間、海防関係の役も勤め、藩士の序列を示す席次も中小姓席・馬廻席まで昇格した。さらに、五代文君も勘定役(文政二(一八二九)年)を経て天保九年に代官となり、飛び地武州領村々の公裁絵図や証文の調査、「村々上金取扱方」、「村々用水

堰道橋御普請掛」等を勤め、度々褒賞を受けている。この間、「房総御備場御出勢之節大筒方術士」(天保七年)、「両総東海岸御固場為地理見分出役」(弘化四(一八四七)年等)、久留里藩が幕府から命じられた海防役の担い手として活躍し、嘉永二(一八四九)年には「若殿様御縁組御入用御借口々示談」も委ねられている。そして同七年には、町郡奉行に任じられて新知五〇石・給人席となり、俸禄から知行(領知)取りへと出世を果たしたのだ。以上のようにして義質・文君は、民政運営の担い手として頭角を現し、海防役等の遂行をも担って家格も上昇し、藩政の前面に登場したのである。

こうして六代文彬も、「東海岸被遊 御巡見候ニ付御供」(安政二(一八五五)年)など海防に関わり、「御近習見習」(同三年)・「御納戸役見習」(同五年)等の藩主側近を経て、文久二(一八六二)年には代官に就くなど、官吏としての能力を継承し、前代同様のコースを歩みつつあった。ところが、慶応四(一八六八)年六月、「京師江貢士被仰付半年勤番」を命じられると、「公務人」「公儀人」にも任命され、公議輿論という政治理念を体現すべく明治新政府が設定した政策審議機関である公議所において、久留里藩選出の議員として活動することになるのである⁴。

こうして代々の田丸氏は、藩の役職を精力的に勤めるこ

とを通じて、久留里藩主黒田氏への奉公を怠りなく果たすことに一貫して努めていたと言えよう。そうした中で、四代義質以降は、民政と海防が奉公の中心となり、その働きが認められた延長上に、六代文彬は公議所の議員に任じられている。このように、代々黒田家への奉公を最大の課題としてきた田丸氏は、その取り組みを通して、民政・海防・公議所での議論という、幕末維新期の諸問題に直面することになったのである。

二 学問する武士

——田丸家蔵書を読み解く——

では、以上のような田丸氏の歩みと「学問」は、何らかの関係を有するのだろうか。このことを知る上で貴重な手がかりとなるのが、田丸家文書中の書物(田丸家蔵書)である。そもそも江戸時代は、日本史上初めて商業出版が成立し、大量の写本・刊本が流通した時代である。ところが従来、古文書に比べ、書物は史料としてあまり注目されてこなかった。というのも、書物は基本的に複製物であり、地域の歴史とも直接関わらない内容を持つことがほとんどだ。だから、人々の意識・行動を直接知りうる古文書に対して、その史料的价值が十分には認められてこなかったのである。

だが、とりわけ二〇〇〇年代以降、近世の書物・出版や読書に注目した研究が数多く登場し、一つの研究潮流となっている。作者の問題としてではなく、出版や流通、さらにはその受け手＝読者の問題として書物を捉えることで、人々の学問・文化的力量や通念・常識、思想形成の過程等を克明に理解できることが、横田冬彦や若尾政希らによって明らかにされたのである。⁵⁾そこで次に、田丸家蔵書(和本約七〇冊)から何がわかるのか探ってみよう。紙幅の都合上、以下に書名のみ列挙しておこう。⁶⁾

地方落穂集／(軍法書)／(手習手本)／琴鶴君治教略論／精選百家 金聲巧連／続染古今和歌集／源空上人御自筆之写／三家妙絶／本佐録／天草軍記大全／白川公御書写／新律綱領／今人五百題／詩工錐鑿／墨場必携／早引節用集／天草合戦／遠羅天釜／家内用心集／詩韻含英／白川侯伝心録／増補和歌題林抄／詩語碎金／独語／弁道書／染古楼月並和歌集／洋外紀略／職原之書／三家 詠物詩／仁術歎心抄／戊戌夢物語／太平策／千字文／小牧戦話／室町源氏胡蝶卷／訓蒙窮理図解／地方凡例録／改正増補柳宮秘鑑／鼈頭熟字増補伊呂波韻集成／告志篇／雨夜の灯／青表紙／武家必覽殿居囊前編／安倍晴明記／武野燭譚／寺格方則

近年次々紹介されている蔵書史料には、数百から数千冊

以上に及ぶものも少なくない。それらに比べれば田丸家蔵書は決して多いとは言えず、また、一見しただけでは蔵書構成の特徴も不明である。

しかしながら、これらの書物の内容やジャンルの傾向、いつ頃、誰によって集められたのかという蔵書形成の過程を丹念に調べることで見えてくることは、決して少なくない。その際、「蔵書目録」のような史料があれば、比較的容易に多くの事実が判明することが多いが、田丸家にはなかった。では、どうすればよいのか。書物一点一点を確認し、そこに捺された蔵書印や持ち主の記名、筆写・購入の年次や経緯を記した識語・奥書の分析が必要だ。例えば、『白川公御書写』の奥書Ⅱ「同藩柳田勝太より借用写置者也／文政三庚辰年七月／神山五百太郎写」からは、同書の原本所蔵者・筆写者・年代が判明する。そのようにして判明する限りで、田丸家蔵書の筆写・購求年代を大まかに区切ってみると、文政年間筆写の写本が三点、弘化・嘉永年間の写本九点、慶応年間・明治初年の写本二点・購求二点となる。現在に伝わる田丸家蔵書は、概ね幕末から明治初年にかけて作成・購求された書籍から成っていたのである。それでは、これらの書物を収集したのはどのような人物だったのだろうか。各書籍の元々の所蔵者だったと考えられる人物を奥書等によって列挙すれば、①田丸彬(義堅・藍

山)、②田丸きく、③神山義衛(③平林重蔵・③柳田勝太、
④森光重(鶴皇堂)、④水沼泰極・④芝山正武・④五十嵐十右衛
門)、⑤鈴木重枝、⑥山田茲忠、⑦伴厚知、⑧藤平氏、⑨
久留里下町矢嶋屋、となる。①は田丸家六代文彬(通称亀太
郎・恵作・謙蔵、一八三三〜一八八八)である。田丸家蔵書の集
書は、この六代文彬が活躍した時期にあたる。なお、②は
田丸家に生まれ育った女性、⑧⑨は城下町人と思われる。

では、③⑦⑧⑨はどのような人々なのか。まず考えられる
ことは、同じ久留里藩士ではないかということだ。藩士か
どうかの特定には、大名家が家臣団に提出させた家譜をと
りまとめた系譜類、家臣名・知行高・役職等を記した分限
帳、家臣の事跡を集めた叢伝等の史料にあたって確認する
必要がある。久留里藩の場合、『久留里藩制一斑』(千葉県、
一九九〇年)、『黒田家臣伝稿本』(上総古文書の会、二〇一〇年、
以下『家臣伝』等の翻刻史料があり、後者には分限帳等に基
づく代々の藩士一覧が収録されている。これらを確認する
と、③⑦の二〇名はいずれも久留里藩士であることが判
明する。田丸家蔵書のうち一定数は元々これらの藩士家の
書物で、それが明治期にかけて田丸家に流入したものだっ
たのである。

さらに、『家臣伝』等によりこれらの藩士の事跡を確認
していくと、『三百藩家臣人名事典』も参照)、彼らは一九世紀

半ばの久留里藩において重要な位置を占めていたことが浮
かび上がる。例えば、③神山義衛(家老は、海防、天保凶
作対応、「大目付年中行事」『撰政秘録』等の藩政記録の編
纂等)、④森光重(勝蔵)は、藩校の句読師や明治期における
旧藩の記録編纂に尽力し、それぞれ田丸氏と共に大きな役
割を果たしたのである。

では、彼らの旧蔵書はなぜ、田丸家に伝わったのだろう
か。背景の一つと考えられるのが、文武の学を通じた交友
関係だ。『家臣伝』によれば、久留里藩校三近塾でも講義
した森清大夫光福(來川)は、「田丸亀太郎・山田四郎・石
井徳太郎・神山鏡三郎等ヲ以テ高足ト為ス」と言う。森光
福は④森光重の祖父、田丸亀太郎は①文彬その人、山田四
郎は⑥山田茲忠の実兄、神山鏡三郎は③神山義衛の子で、
森光福の子・格左衛門と共に④芝山正武の実弟である。⁹⁾
史料制約から検討の余地も大きいものの、右の事実から、
森光福を一つの核として形成された交友関係を通じて、田
丸文彬が彼らの旧蔵書を入手した蓋然性は高いと言えよう。
それでは、田丸文彬が入手した書物には、内容的に何ら
かの傾向や関連性があるのだろうか。まず注目されるのは、
黒田氏との関係を示す書物の存在である。藩祖・黒田直邦
が著した教訓書『琴鶴君治教略論』(神山義衛写)の他、直
邦が交友した荻生徂徠の『太平策』、藩儒として登用した

大宰春台の『弁道書』『独語』(いずれも田丸文彬写)も、直邦を意識して筆写された可能性が高いと言える。

さらに、徂徠・春台の著作の受容は、寛政異学の禁以降、徂徠学派が衰退し、幕末期にかけて多くの藩校で朱子学が講じられたと言われることに鑑みても、見落とせない。田丸氏の場合は黒田直邦との関係での受容という意味合いもあるものの、徂徠・春台の著作が幕末期でも小さくない意味を持ったことをも示唆しているからである。また、『太平策』が理論面から具体策までの政治のあり方を論じた書物(経世書)だという点に関しては、『本佐録』(森光重写)や軍記類(『天草合戦』『天草軍記大全』『小牧戦話』)、湯浅常山『雨夜の灯』(戦国から江戸時代初期の武将の逸話集)等の書物も注目される。『本佐録』や軍記は、近世の政治常識の形成・浸透に重要な役割を果たしたことが明らかにされているからだ。

では田丸文彬は、これらの書物を通してどのような政治意識を持ったのか。教科書が言うように、幕政を批判したのだろうか。この点で注目されるのは、洋学の知識により高野長英がイギリスの動勢を記した、『戊戌夢物語』(神山蔵書一印)だ。この写本で興味深いのは、海防関係の触書等が合冊されていることである。幕政批判ではなく、幕府からの海防役を果たすために『戊戌夢物語』が読まれたこと

を示唆しているからである。

他方で、一見、政治に無関係で個人の趣味に関する書物にも見える和歌や漢詩文関係の本に関連して、田丸文彬は『見聞私記 一』(G一六六)で、他藩の公議人が詠んだ和歌や漢詩文を複数にわたり書き留め、「詩歌ハ……其国之刑政法度、其余之善悪を知り……其流行を見て世之形勢を察するニ足れり」と記す。他藩士と交わる際、和歌や漢詩文の教養が大きな意味を持ったこと、田丸氏はそうした交際のためだけでなく、政治・社会状況の理解に漢詩文等が役立つと考えていたことが浮かび上がるのである。

おわりに

本稿から見えてきたのは、幕政批判とは対照的に、藩の役職の精勤を通じて怠りなく藩主への奉公を果たすことに努めた、幕末維新期の一武士の姿である。奉公の一つとされた民政への取り組みを起点に獲得・蓄積された勤役遂行能力が、幕末維新期に固有の政治課題遂行につながったのである。そうした取り組みやその過程での能力獲得に、「新しい学問」や藩校での教育に止まらない学問(本稿で言えは、徂徠学派の経世書や漢詩文等を通じた交友等)が大きな意味を持ったのだと言えよう。

このように、冒頭で紹介した教科書の中の武士の姿とは異なる側面を持つ様々な人々の意識と行動を豊かにイメージすることは、当時の政治・社会のありようやその意味をより深く理解することにつながるはずである。かつて宮澤誠一は、思想史研究の分析対象について、「儒学諸派や思想家……に限定するのではなく、現実の幕藩権力の政策推進過程における幕府・諸藩の法令、触書、教諭、または幕藩領主の著述、日記、書簡、および被支配階級の訴状、献言書、著述等」の積極的活用を提言した¹¹⁾。今後は、「幕藩領主」に加え、民政の現場を担った武士をはじめとする人々も、思想史研究の重要な分析対象となろう。彼らと民衆とが相互にどう向き合い、いかなる葛藤が存したのか、人々の学びはそれらとどう関係しているのか、本格的な研究が求められている。

- (1) なお、田丸家文書約一〇〇〇点のうち近世史料は、①系譜(約一〇〇点)、②起請文(同)、③元利諸品代金差引帳(同)、④浮世絵(同)、⑤用状・誓詞(約三〇〇点)、⑥和本(後述)、⑦その他(代官関係二点他)等である。同家文書の詳細は、別稿で報告したい。
- (2) 田丸家文書E—「系譜追加調」以下一〇〇点の系譜による。
- (3) 久留里藩については、ひとまず筑紫敏夫「久留里藩黒田氏家臣団の形成と展開」(『千葉県の歴史』二二五、一九八三年)他、一連の研究を参照。

- (4) 三村昌司「公議人の変遷について」(『東京未来大学研究紀要』七、二〇一四年)の一覧表、「公議所日誌」(明治文化全集 一)にも田丸謙蔵の名が確認される。公論理念については、宮地正人「幕末維新期の社会的政治史研究」(岩波書店、一九九九年)等。

- (5) 横田冬彦『天下泰平』(講談社、二〇〇二年)、若尾政希「書物・出版と日本社会の変容」(『歴史評論』七一〇、二〇〇九年)等。なお、特集「日本近世の書物・出版と社会変容」(『歴史評論』六六四、二〇〇五年)、「書物・出版と社会変容」一〜二〇等も参照。

- (6) 書名については、国文学研究資料館提供の日本古典籍総合目録DBも参照。

- (7) (〓)内の人物は、田丸家蔵書中の写本の原本所蔵者・貸与者等である。書物の貸借関係・人的つながりを考える上で重要である。

- (8) 宮間純一「旧久留里藩士森勝蔵の弘文天皇陵治定運動」(『千葉県の文書館』二一、二〇一六年)も参照。

- (9) なお、森光福が死去した際、鈴木重筠・明助、⑤鈴木重枝との関係は未詳)らが、武州岡役所から追悼の漢詩を送っている(『家臣伝』)。

- (10) 若尾政希「『本佐録』の形成」(『社会学研究』四〇、二〇〇二年)等。

- (11) 宮澤誠一「幕藩制イデオロギの成立と構造」(『歴史学研究』別冊特集、一九七三年)。

(こせき ゆういちろう)